同朋舎新社
2,090円（税込）
刊行日 2022年11月

## 小新島たらん
### 新島襄を語る・別巻（六）

本井康博（元大学神学部教授）著

新島襄は、数多くの「小新島」に恵まれました。彼の志を受け継いだ教え子たちが、「小新島」を自称したからです。

新島八重のモットー「襄のライフは私のライフ」を借りると、襄の生き方に倣おうとしたのです。彼らは同志社大学の創設を始め、キリスト教伝道、キリスト教主義教育、社会福祉・事業などに挺身しました。

新島自身もそれを期待して、地上の生涯を終えています。「予、ひとたび死す。されど必ず予の志を継ぎ、これを成就する者が起きてくる」というのです。

恩師の葬儀の際、亡骸を担いで若王子山に登った学生のひとり、牧野虎次などはその典型です。翌朝早く校内の寮を抜け出て、上賀茂の小山に登った彼は、山頂で涙ながらに聖書を読み、祈り、ひとり静かに黙想しました。辿り着いた結論が「小新島たらん」です。

牧野によると、周囲の友人たちの多くも同様の決断を下した由。後年、牧野は社会事業家として活躍した後、同志社総長（第11代）として恩師の遺志の成就に努めました。

本書には、他にも「小新島」が登場します。小﨑弘道（第2代同志社総長）、山室軍平（日本救世軍創設）、安部磯雄（早稲田大学教授）、小野英二郎（理工学部初代学部長）などです。その後も末光信三（同志社女学校校長）や清水安三（桜美林学園創設）、中村遥（水上隣保館創設）などのように、生前の新島を知らない「小新島」が続きます。

著者より

岩波書店
1,034円（税込）
刊行日 2023年4月

## まちがえる脳

櫻井芳雄（元大学脳科学研究科教授）著

働いている脳の中ではどのような信号が出ているのだろう？――これが心理学を専攻していた大学院時代の疑問であった。以来40年以上にわたり、さまざまな課題を行っている動物の脳から多数の神経細胞（ニューロン）の発火を記録するという実験を続けてきた。特に最後に在籍した脳科学研究科では、優秀なスタッフと大学院生に囲まれ、多くの成果を残すことができた。しかしそれでもなお、脳は複雑で謎に満ちており、深く考えさせられることが多かった。本書はそのような体験に根ざした脳の解説である（また最終講義の代わりでもある）。

本書は、まず脳はまちがえるという事実に焦点を当て、それが不可避であること、なぜなら脳内の信号伝達が、本来不確かで確率的であることを、これまでの研究成果をふまえ解説している。また、速さと効率を第一とせず不正確に活動するからこそ、脳は新たなアイデアを創造し、あるいは損傷しても回復できることを、やはり多くの研究に基づき説明している。さらに、脳の活動から生じる心が、その脳自身の活動を変える力をもっていること、あるいは、左脳人間／右脳人間や男脳／女脳などの分類が根拠のない迷信であることなども詳しく紹介している。

特に学生に対しては、脳がいまだに未知であり、だからこそ魅力あふれる研究対象であることを述べたつもりである。しかし学生以外の方にも、いわゆるタレント脳科学者による「脳はこんなにわかってます」という喧伝に惑わされないために、手に取っていただければと思っている。

著者より

※著者の所属・職名は執筆時のものです。

東洋経済新報社
5,500円（税込）
刊行日 2023年3月

## 日本近代銀行制度の成立史
### 両替商から為替会社、国立銀行設立まで

鹿野嘉昭（しかの よしあき）（大学経済学部教授）著

本書は、明治維新から明治14年頃までの銀行制度の整備にかかわる動きを対象としたものであり、日本における近代銀行制度の確立ないし整備過程をダイナミックかつ学術的に描き出すことを狙いとする。

銀行制度の整備にかかわる動きを分析・検証するに際しては、文献資料に加えて各種の統計データを利用するとともに、金融論の視点を加味した。そうした分析視角に対しては「現代的過ぎて、経済史ではない」という批判もありえよう。しかし、そこに本書の特色があり、その意味で、やや異色の金融史として位置づけられる。

もう少し具体的にいうと、本書では、前史として江戸時代の大坂における両替商の機能と役割について検討した後、銀目廃止を経て、殖産興業の推進を目指してまさに朝令暮改のごとく導入された為替会社および国立銀行制度の特色、意義や機能について検討した。

実際、本書での分析対象となった研究課題としては、次のようなものが挙げられる。

・為替会社はどのような業務を営み、なぜ破綻するに至ったのか。政府は公的資金を投入して為替会社を破綻処理したが、そうした処理は実際、どのように遂行されたのか。

・銀行制度の整備に際し大蔵省内で伊藤博文と吉田清成との間で交わされた論争（明治4年の銀行論争）とは一体、どのようなものであったのか。また、伊藤の提案した米国流の国立銀行制度はなぜ選択されたのか。

・国立銀行条例制定に伴い創設された国立銀行4行の経営状況はどのような状況にあったのか。また、明治9年の条例改正後における国立銀行の経営はどのようなものであったのか。

銀行の発展に興味をお持ちの方に本書をお勧めしたい。　著者より

東京大学出版会
7,260円（税込）
刊行日 2022年9月

## 〈非在〉のエティカ
### ただ生きることの歓待の哲学

小野文生（おの ふみお）（大学グローバル地域文化学部教授）著

「「存在か無か」の図式のかげにとり残されてきた〈非在〉の居場所をまなざし、「ともにある」ために、哲学にはなにが必要で、なにが可能なのか。アウシュヴィッツ、水俣病、戦争、市民運動、教育、ケアといったフィールドを縦横に行き来しつつ、人間であることの歓びとかなしみを根源的に問う。アーレント、アガンベン、レヴィナス、石牟礼道子、鶴見俊輔らの思索の糸をたぐりよせ、「ただ生きること」の歓待を呼び覚ます倫理と哲学を織りあげる新しい試み。」

これは、本書の背表紙に添えられた一文です。本書を通してなにを考えようとしたのか、その内容に関して端的に示しておりますので、ここに再掲させていただきました。

本書を執筆しているあいだ、ずっとこころにあったことは、人間の生にそなわっている「弱さ」や「もろさ」や「ままならなさ」を意義づけるにはどうすればよいか、という問いでした。それらを否定するのではない。かといって、単に称揚するのでもない。そのあいだをくぐりぬけながら「意義」を語ること。しかもそれを哲学のいとなみの根底にある課題とむすびつけつつ。これは簡単なことではありませんでしたし、いまもうまくことばにできたとは思いません。ただ、いずれにせよ、ここで哲学のいとなみは「驚き」というよりは「受苦」に端を発する経験として、さまざまな文脈のなかで広く考えなおされています。その思索の苦闘の痕跡として、本書を紐解いていただければ幸甚です。

著者より

筑摩書房
968円（税込）
刊行日 2022年10月

## 社会主義前夜
### ―サン＝シモン、オーウェン、フーリエ

中嶋洋平（大学グローバル地域文化学部助教）著

「空想的社会主義」という用語は人口に膾炙しているが、そのように表現される思想と行動の中身が知られているとは言い難い。「科学的社会主義」と必ず対比されるため、「空想的社会主義」は非科学的で、取るに足らないものと想像されてしまう。空想という語感から、SF作品のような奇想天外な社会を目指したものと推測する人もいる。

19世紀に資本家と労働者の貧富の格差が出現する中、企業家オーウェンは工場経営による利益還元を通して労働者保護を実践し、思想家サン＝シモンは経済成長によるパイの拡大と分配を通した貧困層の生活水準の底上げを模索しつつ、資本家と労働者の紐帯となる道徳について探究した。思想家フーリエは競争心や自負心、利得への愛という人間の情念について思考しつつ、経済的利益を生み出す協同体を構想した。基本的に三者が資本主義の中で社会の改善を求めたのに対して、マルクスとエンゲルスが革命による資本主義の解体無くして社会の変革も無いとして、三者の思想と行動を「空想（ユートピア）」と表現した。

革命の時代でもない今日から見れば、三者の思想と行動は普通のことに思えてしまう。しかも、実は三者の思想と行動（とくにサン＝シモン）は渋沢栄一に影響を与え、日本資本主義の基盤にもなった。しかし、そのような普通のことが今日事実として普通になっているだろうか。ロスジェネ世代の私としては、普通のことが普通になるように、本書がその一助となることを願ってやまない。

著者より

工作舎
2,750円（税込）
刊行日 2022年10月

## ゾンビと資本主義
### 主体／人種／ネオリベ／ジェンダーを越えて

遠藤徹（大学グローバル地域文化学部教授）著

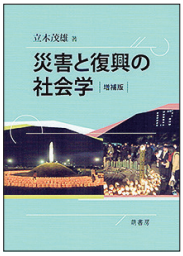
流れてくるニュースを無批判に受け入れ、宣伝されている商品を無批判に購入し、巨大モールの虚構の幸せに酔いしれるわたしたち。交通系カード、キャッシュカード、〇〇ペイなどを通して、無批判に無自覚に消費するよう仕向けられているわたしたち。ティックトック、ユーチューブ、ネットフリックス、アマゾンプライムビデオで「常に楽しむ」ことが当たり前となって、「退屈」を毛嫌いするわたしたち。このままの日常が永遠に続くように錯覚し、それを支えてくれているのが現政権なのだと無思考のまま思い込み、選挙にすら行かないわたしたち。

そんなわたしたちは、本当に生きているといえるのでしょうか？主体性を失い、能動性を失い、操り人形のように生きているわたしたちは、むしろ生きながら死んでいるゾンビと同じ位相にいるのではないでしょうか？

けれどもゾンビとは本来、隷従しつつ反乱する者であったのです。いやゾンビでさえ反乱するのです。その心意気すら失っているわたしたちは、もしかしたらゾンビ以下なのかもしれない。そんなことを考えながらこの本を書きました。ゾンビは遠いカリブ海の神話でも、アメリカ映画やアニメのなかの娯楽表象でもなく、わたしたち自身の問題なのだということがこの本のテーマなのです。

ゾンビを知ることは、自分を知ることだ。それが現代社会の教訓なのではないでしょうか。わたしたちを囲い込み、飼い慣らそうとするこの社会に抗うには主体性の回復が急務だということこそ、この本で伝えたかったことなのです。

著者より




萌書房
3,850円（税込）
刊行日 2022年12月

## 災害と復興の社会学【増補版】

立木茂雄（たつきしげお）（大学社会学部教授）著

1995年1月の阪神・淡路大震災、1997年1月の日本海重油流出事故、2004年3月の能登半島地震、そして2011年3月の東日本大震災等でのフィールド調査や社会調査を重ねながら、被災者支援や災害復興施策の提言にも携わる著者が、「災害が何故、社会学の対象になるのか」、「被災するとはどういうことか」といった主題に答えるために、被災者の目に映る発災から今日までの10年間にわたる時間の流れに沿って、行政・介護保険事業者・ボランティア・地域コミュニティ等が、復興の過程で果たした役割を、障害者・高齢者といった要配慮者からの視点にも目配りしつつ、社会学的手法により多様な切り口から「生活の復興」の実像に迫った著作。2016年刊の初版では、1995年阪神・淡路大震災被災者への10年間にわたる生活復興調査の調査知見を踏まえたうえで2011年東日本大震災から5年目までの調査研究成果をまとめた。2022年12月刊の本増補版では、阪神・淡路大震災被災者の生活復興過程の知見を、東日本大震災から10年間にかけて5度にわたり実施した宮城県名取市民への縦断的社会調査結果とすり合わせを行い、東日本大震災の生活復興過程の全体像を理論化した論考を新たに第13章として追加し、巨大災害からの長期的な生活復興過程の普遍的な全体像に接近している。

著者より

教文館
5,940円（税込）
刊行日 2022年12月

## アメリカ日本人移民キリスト教と人種主義
### ―サンフランシスコ湾岸日本人プロテスタントと多元主義・越境主義、1877～1950年を中心に―

吉田亮（よしだりょう）（大学社会学部教授）著

近年米国史を汚染してきた人種主義の台頭が著しい。コロナウィルス感染の拡がりが、米国内の人種主義や排外主義に火を付け、アジア系やアフリカ系がヘイトクライムの犠牲になったことは知られている。一方で米国は人種主義を撲滅するために闘ってきた多くの闘士を生み出してきた。キングを代表とするアフリカ系は広く定着しているのに対し、本書でとりあげる日本人移民プロテスタントは知られていない。19世紀末以来米国に台頭する人種主義（排日差別）に対し、その抗排日のために様々なストラテジーを駆使して挑んでいった集団である。その方略の特徴は、排日差別の有力な根拠となる不変的な生物的資質よりも、可変性のある文化的・社会的資質に依拠した人間・社会観の提唱とその実証であった。

本論では、日本人移民が自身の文化的・社会的資本をフル活用した様々な活動を紹介している。その資本とは、他人種関係（中国系、白皙系）、祖国日本、家族（二世）、キリスト教諸組織とその人材（教派、教会、青少年組織、教育機関他）、在米日本人移民組織とその人材、社会・文化改良プログラムや運動、そして理念（多元主義）などありとあらゆるものである。日本人移民プロテスタントの戦いは一貫してアングロ優越主義に基づく一元的社会から多文化集団が民主的に共生する社会実現への転換を志向しつづけるものであった。人種主義をボトムアップの視点から見直す好機となることを願っている。

著者より

中央経済社
3,080円（税込）
刊行日 2023年2月

## フォロワーシップ行動論
### 「こと・ば」と言葉

松山一紀（大学社会学部教授）著

本書においてフォロワーシップ行動とは、「こと・ば」に従う行動を指しています。ここで、「こと」とは、社会や組織における共通目的を実現する「こと」を意味しています。私たちフォロワーは、常に何某かの「こと」のなかに身を置いています。しかし普段は、その「こと」に気づいてはいません。それでは、「生きている」とは言えないでしょう。真のフォロワーは「こと」を自覚し、その「こと」に対して実践的に関与しなければならないのです。そうすれば「こと」のなかに、「今・ここ」が立ち現われ、真のフォロワーシップ行動が生じてくるはずです。それは同時に、行動が生じるための「ば」が現れてくるということでもあります。こうして、「こと・ば」を自覚し、それを言葉にすることができたとき、いわゆる「自分事」が成立します。まさに、「仕事」とは、「こと（事）」に仕えることなのです。

リーダーシップが困難な時代にあって、私たちフォロワーはまず、ファースト・フォロワーを目指すべきだと、本書では主張しています。ファースト・フォロワーとは、リーダーに最初に従う人ではありません。ファースト・フォロワーとは、聖なる共通目的を最初に見出し、それに従う人を指しています。ファースト・フォロワーの周りに他のフォロワーたちが集まってきたとき、そのフォロワーはリーダーとなります。まさに、同志社とは、同じ志を有したフォロワーたちが、新島襄というファースト・フォロワーのまわりに集って生まれてきた学び舎なのです。

著者より

明石書店
3,850円（税込）
刊行日 2023年2月

## 中国の介護保険構想
### 持続可能な制度構築へ向けた政策分析

楊慧敏（大学院社会学研究科外国人留学生助手）著

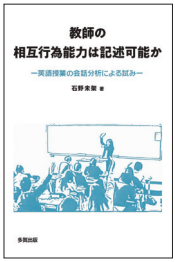
中国において高齢化の深刻化に伴い介護問題が切実な問題になりつつある。この問題の一対策として打ち出されたのは、介護保険制度の創設である。制度枠組みを明確にするため、介護保険パイロット事業の展開や関連する研究の蓄積が行われてきた。だが、中国に構築、かつ持続可能的に実施可能な介護保険制度の枠組みが明確になっていなかった。

そこで、本書では、２０１６年に指定を受けて介護保険パイロット事業を展開する15地域を取り上げて地域特性および制度枠組みの相違点や特徴を分析し、制度枠組みの方向性の提示を試みた。

書名の「持続可能」にこだわった理由は、要介護高齢者の増加や介護期間の長期化が生じている中、それらに対応する介護保険制度の持続可能性が問われるからである。本書では、持続可能性のある公的介護保険制度を、「一定期間において介護財政の収支バランスがとれる財政基盤をもち、被保険者の介護ニーズに（十分）対応した介護給付を支給できるもの」と定義し、その定義に含まれる５つの要素をもとに15地域の介護保険制度を評価した。

中国の高齢化問題が注目されている中、本書はその問題に緊密に関連する介護保険に焦点をあて、著者が日本での介護保険研究の経験を踏まえて中国の高齢者福祉への提言を行ったものであり、日本と中国の高齢者福祉研究の交流を促進する一つのきっかけになれることを願っている。

著者より




多賀出版
4,400円(税込)
刊行日 2023年2月

## 教師の相互行為能力は記述可能か
### —英語授業の会話分析による試み

石野末架（大学グローバル地域文化学部准教授）著

私は本書で「教師の相互行為能力は記述可能か」という問いに会話分析の手法を用いてこたえようとしています。具体的には、国内の学校英語教育場面のデータを対象に会話分析を行いました。前半は理論的な話になっていますが、中盤の授業場面の会話分析は多くのひとにとって馴染みのあるものとして読めると思います。分析したデータは私がフィールドワークで収集してきた国内の中学校や高等学校の英語の授業データです。ですので、特に学校の先生を経験した人にとっては「あるある」な現象として楽しんでもらえる部分だと考えています。

本書の内容を簡単に紹介します。前半では教師の相互行為能力をSteve Walshの「教室相互行為能力」概念やDonald Schönの「行為の中の知」概念を参照して再定義しています。次の章では、会話分析に馴染みのない人でも会話分析のデータを理解できるようにトランスクリプトの読み方を解説しています。そして本論では先に述べた国内の英語授業場面を対象に会話分析により教師の相互行為能力を記述しています。後半の章では、実際に私が大学の教科教育法の授業で行っている実践を詳しく紹介し、最新の研究内容にもふれています。会話分析を授業研究に応用しようとする全ての人にとって有益な本になるよう書いたつもりです。何よりも、重要な知識をコンパクトにまとめた点が本書の売りだと思っています。ぜひ気軽に読んでもらえると嬉しいです。

著者より

新教出版社
5,995円(税込)
刊行日 2023年2月

## 動物という隣人
### 共感と宗教から考える動物倫理

鬼頭葉子（大学文学部准教授）著

本書の副題にもある「動物倫理」とは、1970年代半ば以降、欧米を中心に活発な議論が展開されてきた倫理学の一分野である。現代の動物倫理は、哲学者ピーター・シンガーとトム・レーガンの画期的な著作によって開始されたが、前者は功利主義、後者はカント的義務論にそれぞれ依拠していた。以後の動物倫理は、法学・法哲学、フェミニズム思想、キリスト教神学など、様々な思想領域に展開し広く知られるようになった。

現代の動物倫理は、登場から約半世紀を経て大きな進展を見せたが、いくつかの思想的課題がある。功利主義や義務論に基づく理論は、公平一律な原理原則に基づき、個別のものに配慮する「共感」など感情の重要性について議論してこなかった。また動物倫理は、哲学、キリスト教神学、法学を思想的源流に持つが、これら三者の横断的議論は十分ではない。とりわけ本邦では、キリスト教神学を基盤とした動物倫理には注目されてこなかった。さらに、従来の動物倫理では、害獣など人間にとって不都合な動物についてどう考えるか、説得力のある議論ができていなかった。ここには動物倫理における、人間に似たものや人間にとって有益なものに配慮しようとする人間中心主義という難題が見て取れる。これらの問題意識から研究を進めた成果が本書である。

本書では、筆者の専門である宗教哲学を核とし、「共感」と「宗教」の観点から思想史を辿りつつ、新たな動物倫理の思想的モデル（「権利・共感・宗教モデル」）を提唱した。筆者は、人間の自然な感情としての共感と、宗教的共感としてのアガペー、また自他の脆弱性を基盤とした関係的概念としての権利が、動物に対する倫理的配慮に大きな役割を果すと考える。

著者より

有斐閣
7,700円（税込）
刊行日 2023年3月

## 沖縄の引き延ばされた占領
### 「あめりか世」の法的基盤

新井京（大学法学部教授）著

戦後の米国による沖縄統治は、国際法および米国憲法の下でどのように正当化されえたのか。一般的には、対日平和条約3条による日本の同意が法的根拠であるとされる。しかし、日米両政府は、この曖昧な平和条約3条を最大限に利用して、「銃剣とブルドーザー」による基地の強制、基地を自由利用するための外国領域の統治、それを日本が沖縄に「残存主権」を維持するかたちで承認したことといった状況の異常さを糊塗してきた。国際法研究者も、従来、日本の同意が米国による沖縄統治の必要十分な法的根拠であるとして、それ以上の意味を探求してこなかった。

本書は、歴史学者が掘り起こしてきた日米の一次資料を法的視点から紐解くことによって、次のようなことを検討した。①米国が平和条約以前に享受した戦時占領の旨味（占領国の特権）を平和条約後いかに維持し、それを内外に向けていかに正当化しようとしたのか。②それが沖縄の人々にどのような痛みをもたらし、いかに沖縄社会を歪めたのか。③日本がそれを半ば承知しつつ残存主権なる空虚な概念に縋らざるをえなかったのはなぜなのか。こうした検討の結果、法的レンズから見れば、米国の沖縄統治を、米国によるグローバルな海外基地網構築の文脈の中に、さらに米国の「隠蔽された」植民地主義の一環として位置づけうることも明らかにした。何よりも、本書を通じて、日米の合作によるこの平和条約3条体制という「法的怪物」が、復帰後も継承され、今日のいわゆる「沖縄問題」（＝「日本」問題）の根本的原因になったことを再確認したかったのである。

著者より

東京大学出版会
6,050円（税込）
刊行日 2023年3月

## 開発協力のオーラル・ヒストリー
### 危機を超えて

峯陽一（大学グローバル・スタディーズ研究科教授）著

戦後の日本には、途上国の国づくりに貢献しようと本気で努力した専門家たちがいた。日本側の経験を記録した文献は多く出ている。しかし本書では別のアプローチをとった。日本人と一緒に汗をかいた現地の人たちが協力の経験をどう記憶しているか、体系的に調べようとしたのである。

訪問した国は10カ国、インタビューに応じてくれた人たちは213人に達した。インドネシアのダム建設、チリのシャケ養殖、タンザニアのコメづくり、マレーシアの職業訓練、ケニアの理数科教育、ヨルダンの女性の健康、水俣とアマゾンを結ぶ水銀対策、カンボジアと沖縄の平和教育など、ひとつひとつのプロジェクトが現代史の物語である。文書史料に加えて口述の記録を駆使するオーラル・ヒストリーの手法は、それなりに定着してきている。本書では開発協力への応用を試みた。

現在、本の英語版を制作する作業を進めている。対象国には反日運動が活発だった国もある。グローバルサウスの人々は戦後日本の営みをどう見てきたのか。私としては現地の人たち自身に本書を読んでもらうことで、はじめて仕事が完結すると思っている。

高校の社会科のカリキュラムが大きく変わろうとしている。私の前著『2100年の世界地図』（岩波新書）は「地理総合」を意識したが、このオーラル・ヒストリーは「歴史総合」を意識したものである。学術水準を落とさず、日本の若者たちに日本の開発経験を伝えていきたい。

著者より

ホシツムグ
1,980円（税込）
刊行日 2022年7月

## 砂・砂・砂 SAND
## 「砂の遊びとアート」と保育

笠間浩幸（かさまひろゆき）（女子大学現代社会学部教授）著

取るに足りない一粒の砂も、天文学的な数が集まると独特な風景を生み出し、文明や文化を支える素材となります。そして何故か人間の子どもはこの「砂」に触れると同時に、活動のエネルギーが呼び覚まされ、想像と創造の「遊び」の世界へと入り込みます。かつてドイツには「砂は最良のエデュケーター（教育者）」という言葉があったのも、不思議ではありません。

本書は、0歳から6歳までの長期にわたる子どもの砂遊びの様子を継続的に観察し、子どもの発達課題と保育者や保護者などの大人の関り方について、多くの実例と写真をもとにまとめた書です。

一言で「砂遊び」と言っても、手指の微妙な操作や大きな身体運動もあれば、「ごっこ遊び」のようなイメージ遊び、どろ団子やトンネル掘りなど砂の性質に関わって試行錯誤を繰り返す遊び、そして仲間との協働による大掛かりな作業もあります。また、砂場では、ホッと一息、といった子どもの情緒的な安定も観られます。

そんな砂場の魅力を余すことなくとらえ、子どもたちが心から楽しむことのできる「砂の遊びとアート」活動の具体的なノウハウを本書は伝えます。

また、今日の日本社会では、公園の砂場が急速に消滅しつつある一方で、砂遊びによる地域子育て支援や企業等による屋内砂場、人工ビーチなどの設置も進み、新たな注目がなされています。

本書を通して、一人でも多くの子どもたちが、砂場の魅力を体現できることを心から願います。

著者より

吉川弘文館
2,970円（税込）
刊行日 2023年1月

## 変貌する中世都市京都
## 京都の中世史7

山田邦和（やまだくにかず）（女子大学現代社会学部教授）著

武士の時代である日本の中世は、ややもすると京都よりも東国を中心にして語られてしまう。しかし、実際には中世を通じて京都は日本の首都としての地位を譲ることはなかった。『京都の中世史』と題されたこのシリーズは、そうした観点から新しい日本中世史像を構築することを目指している。

本書はその1冊であり、考古学的な研究成果を主として中世京都の都市構造の変遷を通観し、京都の考古学の研究成果をわかりやすく示すことをこころがけた。たとえば、考古学と文献史学の成果を総合して各時代の市街地を復元した図は、京都の都市構造の変化を一覧できるきわめて便利なものとなったと思う。

中世の京都を、中心市街地である「洛中」だけではなく、その周辺の「衛星都市」群をも含めた大きな都市圏である「巨大都市複合体（コンプレックス）」として捉えるのは、著者が特に強調するところである。12世紀の世界の諸都市の面積の比較の中で中世京都を考えたり、鎌倉幕府の成立時期を源頼朝勢力が源義仲を滅ぼして京都の王権の守護者としての地位を確立した元暦元年（1184）1月20日とするなど、思い切った試みもやってみた。

考古学を主体として京都の歴史を語る書物は、まだまだ多くはない。その点で、本書は今後の京都の都市史研究の基本書としていただけるのではないかと思っている。

著者より

ナカニシヤ出版
5,500円（税込）
刊行日 2023年2月

## 欧州の教科書にみる多様化する家族

### イギリス・フランス・ドイツ・イタリアの小学校教科書に描かれた次世代へのメッセージ

塘（とも）利枝子（りえこ）（女子大学現代社会学部教授）著

現代の家族のあり方はますます多様になっている。本著は、欧州4ヶ国の1960～2010年に出版された774冊の小学校国語教科書に描かれた「家族」を分析した結果と、そこに映し出された社会の姿を論じた。本著は10章から構成されているが、ここでは特に3つの章について紹介しよう。

3章「家族の解体と再構築」では、教科書に描かれた離婚や再婚、別居中の子どもとの交流や複合家族の様子、国際養子等について取り上げた。多様な背景を持つ成員で構成される家族を欧州の社会が受け入れる姿が浮かび上がってきた。4章「国際化する家族」では、移民や難民の家族が増加する欧州4ヶ国の現状も踏まえた分析・考察を行った。ドイツでは移民二世の複雑な心情が描かれており、フランスでは移民の受け入れについてフランス中心主義と相対化の中で葛藤するフランス社会が浮かび上がってきた。

5章「家族内の性別役割分業」では、4ヶ国の父親と母親の子育てを比較分析するとともに、時代による親役割の変化をも提示した。また子どもの遊びも時代によって変化しており、2010年版ドイツの教科書には女児が男児より上手にバク転やサッカーを行う姿が描かれていた。2023年ジェンダー・ギャップ指数において6位のドイツと、125位の日本を比べると、子どもの価値観に影響を与える教科書の内容改革も今後の日本では必要になるであろう。現在日本では性別役割分業だけではなく、家族の多様性に向けて様々な変革が求められている。欧州の子どもに提示された教科書のメッセージから、日本の教育が学ぶものがあるのではないだろうか。

著者より

クリエイツかもがわ
2,200円（税込）
刊行日 2023年3月

## シェアダイニング

### 食とテクノロジーで創るワンダフル・エイジングの世界

臼下菜穂子（くさかなほこ）（女子大学現代社会学部教授）著

年を重ねるごとに人生は豊かになる。そんな世界を実現するために、心理学の理論とテクノロジーを駆使して賑わいのある食の場をつくりました。シェアダイニングは、スーパーマーケットや公共施設に設置した共同の調理場に、人が集まり食の喜びを分かち合うシステムを備えたコミュニティの台所です。新しい食文化として、シェアダイニングの全国的な普及への動きが起こり始めています。

孤立や孤食が進む現代では、家庭内だけでなく、広く地域全体でつながりを育む仕組みが必要とされています。そこで、共食の場をコミュニティの真ん中に置き、多様な人が参加しやすい仕組みを実現する試みとしてシェアダイニングのプロジェクトがスタートしました。初めて参加する人や交流が苦手な人が、どうすれば気軽に参加できるのか。参加の楽しさはどのような条件下で高まるのか。これらの課題に対し、文理融合・産官学連携で解決をめざす最先端の取り組みです。

この本は、人間の知恵とテクノロジーを融合し、アートと科学で「長く生きる意味」を創造するイノベーションへの挑戦を紹介させていただくものです。超高齢社会における孤立の問題を背景に、食を通して喜びを分かち合い、個を超えたつながりを創造する。リモート・対面の食の場での空間・道具・活動のデザインとそれを支えるテクノロジー開発の軌跡を、フルカラーの映像とともにたどります。

みなさまの日常の今ここにある喜びの風景と重ねて、ワンダフル・エイジングの世界をご一緒に旅していただけると嬉しいです！

著者より